

メタデータ共有システムを用いた資料のアーカイブと 知識の構築に向けて

上松 大輝（総合研究大学院大学 / 国立情報学研究所）

本発表では、資料のアーカイブ、ここでは現物資料の整理のためのメタデータ共有システムの設計と、メタデータ共有システムを用いることで資料が持つ意味が定義され、意味的なつながりをたどることで概念や知識が構築されていく可能性の考察を行う。

メタデータ共有システムとは、水島ら[*1]の議論を根底にしており、「メタデータ”を”（効率的に）共有するシステム」ではなく、「メタデータ”によって”（資料の存在や資料をめぐるコミュニケーションについて）共有するシステム」を目指している。さらに、棕本・上松[*2]は、メタデータ共有システムの戦争関連資料への適用と「戦争関連資料」という概念を浮かび上がらせるメタデータを用いたコミュニケーションに向けた構想を提案している。ここでいうメタデータ共有システムは、具体的なアプリケーションだけではなく、データそのものやデータの流れを含む。ある種、人が何かを記憶し理解する知識構造を模したものを示している。情報記号論(石田, 2019)[*3]では、「人間が〈記号過程〉に関わっているときに、機械は〈情報処理〉を担当している」とし、ソシュールの「ことばの回路」と「シャノン・モデル」をコミュニケーション回路にマッピングすることで、人の記号過程（セミオーシス）と情報処理のインタフェースを提示している。メタデータ共有システムでは、メタデータ付与の簡易化や、メタデータや資料のリンク関係を利用して、新たな資料やメタデータの発見をサポートする。これは、人間にとっての記憶や思考をめぐる記号過程をメディアとしてサポートするとともに、このシステムそのものも、記号、つまり意味や概念、知識を連鎖的に体系化していく「機械的な記号過程」のように働きうるのではないだろうか。

本発表では、メタデータ共有システムを利用して整理された戦争関連資料の実例をもとに、メタデータによる意味付け、資料やメタデータの関係性から新たな概念、知識を導き出すプロセスについて考察する。さらに、メタデータ共有システムが、我々の実世界における多くの事象、実態のない実態、さまざまな捉え方があることを、どのように表現するのか、これらの課題を解くための知識システムとなりうるか検討する。

参考文献

- *1 水島久光・棕本輔・上松大輝「コミュニティアーカイブ連携のためのメタデータスキーマについて」(デジタルアーカイブ学会・第 5 回研究大会/デジタルアーカイブ学会誌 4 巻 s1 号, 2020) https://doi.org/10.24506/jsda.4.s1_s27
- *2 棕本輔・上松大輝「戦争関連資料をつなぐメタデータ共有システムの構想」(『ライブラリー・リソース・ガイド(LRG)』第 36 号・特集「戦争の記憶と記録」, 2021.8) <https://arg-corp.jp/2021/08/13/lrg-24/>
- *3 石田 英敬「『情報記号論』講義 ―総括と展望―」(『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』第 96 号, 2019.3) <https://www.iii.u-tokyo.ac.jp/about/bulletin/journal>